

走りだした外国語コース

編集 部

そろそろ秋めいて来た今日この頃、試験も終わりに近づき、秋休みは目前に迫っている。約2週間の休暇の計画に胸を弾ませている友人達を横目に、少々の焦りを感じつつ、私は原稿用紙に向かう。また、この時期には、1年生にとってのコース決定、2年生にとってのゼミ決定についての話題が多くなるのではないだろうか。後期の講義はそのことを念頭に置いて選択しなければならないのだから。

さて、今年から出発した「外国語コース」、早くも半年が経過したわけであるが、その中身はいったい何なのであろうか。以前の飛翔では、外国語コースの各教官方の御意見、コースの概要などを取り上げたが、今回は、学生が目で見た外国語コースについて述べてみたいと思う。1年生の方のコース選択に少しでも参考にしていただければ幸いである。ついでには、外国語コースの2年生及び外国語コース志望の1年生にアンケートに答えてもらった。その結果に、私の多少の私見を加えてみたい。

外国語コースと聞いて浮ぶイメージ

2年生の場合、「きっと厳しいだろうな。」「大変ハードなところだと思っていた。」「実用英語が身につくと同時に、言語学・文学についても学べる所。」「広島大学の中の国際化へのフロンティア。」「大変すばらしい仲間がいるところ。」というようなイメージであった。これに対して1年生の場合は、「世界にはばたく外国語コース。」「外国語を手段として国際的な人間を養成するコース。」であり、他方では、「外大は華やかだが、それに比べて頼りない感じがする。」※「少数激戦コース。」※「総科のエリート。」などという返事も返ってきた。2年生にとっては、新設の外国語コースであり、それだけに、コース説明会等での教官側からの積極的なアピールの効果があったものと思われる。また1年生にとっては、これからコースを決めなければならないこともあり、希望者も多いことから※の様なイメージを持っているのだろう。外国語コースの存在をはっきり知らされていなかった2年生に比べ、最初から外国語コースを希望してきた1年生には、ある程度の意識の違いが見受けられる。外大に比べ見劣りするというのは、外国語大学という1つの単科大学対1学部の中

の1つのコースという規模の違いと、伝統の差から生ずるのであって、今後の発展を期待すべきである。外国語コースに対する要望

圧倒的に多かったのが研究室の使用についての事だった。外国語コースの研究室は、新館の4階に、教官方の研究室と並んである。中には10人分の机と椅子が置かれ、ビデオ・ラジカセ、その他が備えてあり、書棚にはズラッと本が並べられている。この研究室の使用可能時間帯は、9:00AM~5:00PMである。というのは、研究室の鍵が地域文化図書室にあり、そこに勤務している方の勤務時間以外には鍵を使えないからだ。そういうわけで、外国語コース所属者の間には、「研究室の使用時間帯を伸ばして欲しい。」「鍵をもっと自由に使いたい。」という要望が強く、その他にも、「研究室にロッカーが欲しい。」「来年度の人数増加を考えると研究室が狭い。」と、研究室に関する不満が多いことがわかった。それ以外には、「取らなければならない演習の単位が多すぎる。」「演習が1単位なのが辛い。」「海外留学のチャンスが欲しい。」「外国語コースに限らず文系にコンピューターをやらせるのは少し酷だ。」等々が出た。勝手な言い分だと言ってしまうまでもだが、そこには、外国語コースのお兄様、お姉様方の多忙さや苦しさが表れているのではないだろうか。逆に言えば、彼らにそれだけのことを消化するよう要求されているのだ。

1年生は外国語コースでどのような教育を望むか
「語学は会話中心に。」「LLなどでの実用面の強化。」

「実践的な語学教育。」「実際に留学生やネイティブ・スピーカーと話したい。」など予想通りの答えが返ってきた。今の外国語コースでLL機器を利用した授業はかなり行われているが、会話の面での充実は今一步というところだろうか。

外国語コースについて知りたいこと

「外国語コースに入りたいというすっごい熱意だけじゃダメなのかしら。」「何人が希望しているのかも」「知りたいことはないから、とにかく入れて!」と、何やら切羽詰まったものが感じられる。「1つの群に1人だったらどうなるのか。」(答)たとえ1人であっても受け入れてもらえる。それから、たとえば

フランス語を主専攻にして、Ⅲ群に1人だったとしても、副専攻としてフランス語をとっている人が恐らくいるはずであるから、講義で1人になることはないだろう。「外国語コースに入ったら、どの程度の語学力がつかますか。」これについて外国語コースのMさんに質問すると、「どの程度とは言えないけれど、語学力は絶対につきます。ただ、外国語コースに入ったからつくというのではなく、自分で努力しなければだめ。」という答えだった。それではどのようなカリキュラムで、どのような勉強をするのか。

1例として、外国語コース所属の某氏の時間割を紹介してみよう。(下表参照)

また、外国語コースの専門で個性的な講義を紹介してもらった。

現代英語語法演習 今里教官

内容は少し旧式の英語文法

「先生が滅茶苦茶おもしろい。ギャグの塊だ。」

注：先生は大声で笑えないギャグを連発するそうです。

イギリス地域研究 米田教官

内容は、簡単に言って読解

「溢れるパワー。一生忘れられない授業です。」

注：予習の分量と突然のレポートは有名?!

英語聴取法演習 谷本教官

内容は同時通訳の練習

「外国語コースの厳しさを身を持って感じる授業である。」「単語レモン(英単語帳)による、vocabularyのincrease。」「文化・経済政治をテーマにした資料の逐次通訳。」「諺の『鬼も18番茶も出花』を英語で言わないといけない。」「教官の声が洪い。」

現代言語理論 岩倉教官

内容は最新の英語文法

「今までと違う、英語の見方ができますよ。」

時事英語演習 三浦教官

「ケネディ大統領の演説やエリザベス女王の演説を聞いたのは最高。F E Nや有名なスピーチの書き取りをしたり、L Lを使った楽しい授業でした。」「アポロ月面着陸のニュースとか聞けるのが面白かった。」

将来の展望

「将来はどのような方向に進みたいですか。」と聞いたところ、2年生からは「もちろん外交官、は夢のまた夢で、英語の先生が妥当なところだ。」「国際舞台で活躍したい。」「通訳・観光ガイド等ができればいいのだけれど……。」とちょっと頼りないお答え。むしろ1年生の方が具体的且つ明確な返事が返ってきた。「海外特派員。」「朝日新聞社海外支社の記者。」「外資系の企業に勤めて世界をかけめぐる。」「観光案内業。」「全日空の空港勤務。」「同時通訳。」「なるほど! ザ・ワールドの剽軽由美さんを目指しています。」なんてバラエティーに富んでいるのだろう。総科生のモラトリアムの風潮は少しも感じられない。総科に来てから外国語コースを知った2年生と、初めから外国語コースを狙って来た1年生との違いであろうか。しかし、別の見方をすれば、2年であるが由にはっきりしたことが言えないのかもしれない。本当は彼らも心の奥に大きな夢を抱えているにちがいないのだ。

外国語コースの歴史と伝統は、今スタートしたばかりである。今後の大きな発展に期待したい。

(文責 内藤千恵美)

< 2年前期時間表 >

	月	火	水	木	金	土
1	現代英語語法演習	地域開発論Ⅱ	英語表現法演習Ⅰ	総合言語理論	アメリカ地域研究	時事英語演習
2	英語翻訳論演習	中国語表現法演習Ⅰ	現代言語理論	プロ通Ⅰ	英語聴取法演習Ⅱ	日本史研究
3	イギリス地域研究	経済B	英語Ⅰ	中国語解読法演習Ⅰ	日本語表言論	すごいだろう!
4	教育原理	保体理論	アメリカ社会文化研究	英会話演習Ⅱ	英語Ⅰ	すごいだろう!

すぎら つとむ
杉浦 勉

すぎき せいいち
鈴木 誠一

スペイン語世界から学んだこと

本学史上初のスペイン語教師

としての御挨拶にかえて

スペインやラテンアメリカの国ぐにのこを豊かな先進国だともう方はあまりいないとおもいますが、ではどうしてこれらの国ぐには豊かにならなかったのか、すこしかんがえてみたいとおもいます。いちばん簡潔なこたえ方は「あいづらバカで怠け者だからだ」ということになります。しかしその「バカで怠け者」の国民が、十六世紀には北はベネルクス三国からオーストリア、スイス、東はナポリ、シチリア、さらに新大陸のカリフォルニア、テキサスから最南端のパタゴニアにわたる地域で活躍していたことも事実であります。スペインの没落に象徴されるスペイン語世界の近代化の挫折について、政治経済、社会にかかわる複雑な要因が指摘できるでしょう。けれど理念上のおおきな特質として、次のふたつの歴史的な出来事が有益な示唆をあたえてくれるとかんがえます。第一は近代スペインがはじまりつつあった頃発布された、ユダヤ人追放令です。ユダヤ人は当時スペイン社会の特に商工業層において中心的な位置をしめる民族でしたから、かれらを追放することは、近代資本主義の基盤をなすブルジョワ階級の成長に決定的な影響をあたえました。しかも重要なことは、反宗教改革の旗手であったカトリック王国スペインは、宗教裁判所の設置によってユダヤ教徒をはじめとする異端者を徹底して排除する政策をとりました。ユダヤ人ばかりでなく、かつての征服者イスラム教徒も弾圧の対象となったことはいうまでもありません。第二はスペイン内戦の惨劇です。この戦争では約百万人のスペイン人が死亡しましたが、これらのなかで戦闘によって死亡したのは十万から十五万といわれています。残りの数字は処刑、報復、迫害、弾圧などによる死者で、これは戦後も続けられました。このように、意見やイデオロギーを異にする者を排除し、脱宗者を徹底的に抑圧する社会は<近代>ではないといわねばなりません。<近代>をこしらえるもの、それは批判や否定である — これがセルバンテスの小説やガウディの建築やオクタビオ・パスの詩からわたしが学んだことです。 (外国語コース スペイン語)

(ご希望により写真は掲載しませんでした。
編集部)



このたび、本学部スタッフの仲間入りをさせていただきまして大変光栄に存じます。どうかよろしくお願い申し上げます。

私は、ゲルマン比較歴史言語学を専門としています。簡単に申しますと、ゲルマン諸語のうち文献上最も古い時代(およそ4~10世紀)に使われた古ゲルマン諸語、即ち、ゴート語、古英語、古サクソン語、古高ドイツ語、古スカンジナビア語の構造(音韻、形態等)の比較に基づいて、これらの言語の共通の源であると考えられるゲルマン祖語(記録には残っていない)を再建し、上述の下位言語への分化、発達過程を記述、説明することを仕事としています。さらに、ゲルマン語は、インドヨーロッパ語族内の一派をなしていますので、同語族内部における歴史的、類型的な位置づけも研究課題になります。(私の考えではゲルマン語は表層上の著しい変容にもかかわらず、内的構造においてはインドヨーロッパ祖語の諸特徴をよく保持しています。)

私の現在の研究テーマの一つは、「古ゲルマン頭韻詩韻律構造の起源と史的発達」です。*Beowulf*(古英語)、*Heliand*(古サクソン語)、古*Edda*(古スカンジナビア語)等の古ゲルマン頭韻詩にみられる形式的構造的諸特性の起源、成立過程及び史の変遷、他の印欧語(例えば古アイルランド語)韻律法との比較、並びにゲルマン語派内部における比較を通して明らかにし、韻律の面でもゲルマン語は他の印欧語に劣らず保守的であることを示したいと考えています。

専門分野を離れましては、目下のところ次のような問題に関心をもっています。この方面でもみなさまからいろいろご教示いただければ幸いです。

①パソコン(Macintosh 512K)をいかに活用するか。(もったいないことに、私は今のところワープロとゲーム用にしか使っていません。)

②比較神話学の知見を言語研究にとり入れる。

③聖書翻訳をめぐる様々な(神学、解釈学、異文化間コミュニケーション、等々)問題点を探る。

④何故チョムスキー言語学は日本でうけているか。東京都出身。既婚。文学士(大阪外国語大学、1979年)、文学修士(名古屋大学、1981年)、Ph.D.(The University of Texas at Austin, 1986年)。

(外国語コース 英語)

黄色い柵その後

編集部

今年(1987)の四月より学内の交通規制が強化された。この文章を読んでおられる人の中にも、学校の近くに泣く泣くガレージを借りたり、自動二輪の学内通行ステッカーを、「カッコ悪い」と思いつつ、バイクに貼っている人もだいたいいらっしゃるのではないかと思う。また、チェーンで固定された車を見て、気の毒だと思われた方も少なくないだろう。こうやって、教職員・学生を含めて不便を感じているにもかかわらず、学内の交通規制が厳密化された事については、どのような背景があるのだろうか。

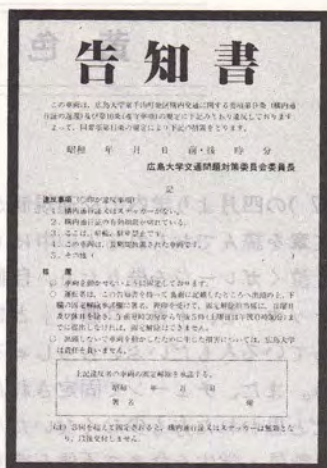
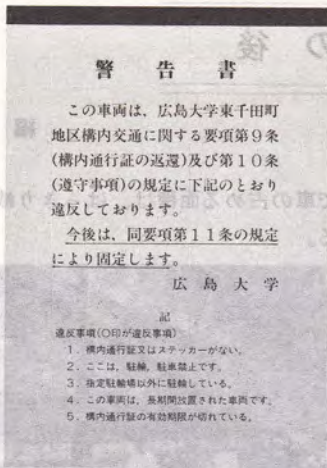
今年四月に出された「広島大学交量問題対策委員会」の広報によると、今回の規制強化の原因については、構内の自動車・バイク等の増加は、交通混雑を招き、交通事故の多発、物品搬入の障害、授業や研究の妨げ、緊急自動車の入構遅滞をもたらす、という理由が記してある。確かに、教育・研究の場である大学で、車やバイクが走り回り、騒音を立てているのではお話しにならない。また、災害時を考えると、オープンスペースは広い方が好ましいのは当然である。加えて、学内の道路が付近の住民の生活道路としての性格を持つことを考えると、狭い場所に多くの車が通っていれば、安全面での不安が大きいのもうなづけるし、もちろん学内の教職員・学生の通行の安全も保証されなければならない。(今回の取材で初めて知ったことなのだが、学内の道路は公共性を持ち、付近住民の生活道路としても使用されるべきなのだそう。もちろん一般道路とは異なるが、周辺の方は手を振って構内の道路を歩行できるのである。)

では、諸問題は実際に解決しているのだろうか。実際に感じておられる方も多いと思うが、構内の車の台数は減少している。昨年七月時の構内通行証の発行枚数は220台分であったが、現在は深夜の実験等の特別許可(構内通行証C)が約16台分、二部学生の通学便宜を計るため(通行証A)の許可が12台分となっており、10分の1近くに減っている。加えて、森戸道路及び正門前の駐車禁止罰則を厳しくした(原則的に内外部車を問わず駐車禁止、違反車は固定)ことにより、かなりすっきりした印象を受け

る。構内で車の占める面積は、はっきり減少しているのである。



しかし、確かに車の台数は減っているものの、まだ学内の交通事情が完全に良くなっているとは思えない。北門から構内に入られるとよく分かると思うが、二輪車(自転車も含めて)が多いのである。北門から総合科学部の自然科学棟沿いの歩道には、自転車、原付があふれているし、理学部の入口周辺の駐輪禁止の区域にも、二輪車は止めてある。歩道で立ち話もできないし、正規の駐輪場に止めた原付を出す時に邪魔になる。何より、理学部の緊急車庫入口がふさがれており、万一の時が心配だ。車の減少や、定員増が二輪車の増加を招いたのである。二輪車の大半は、構内エンジン停止を無視しているし、今年から定められた、「自転車・原付・自動二輪」の駐車区分も必ずしも守られてはいないのである。この駐輪区分には、かなり苦心がしてあるようで、三回にわたって入構する二輪車数のカウントが行われたということだし、重い自動二輪は各入口付近に駐輪できるように配慮してある。つまり各駐輪区分に従って二輪車を駐車すれば全部収納できるはずなのだ。しかし、人間の心理というのは、なかなかそうはいかないもので、少しでも近いところにとめようとするものである。自転車も黄色い柵の内側には、駐輪場が余っているのに、原付、自動二輪用の駐輪場に置いてあるのだ。このように大学側の配慮は、ほとんど生かされていないのである。まだまだ学内の交通事情は完全に改善されていないという気がする。



- 左・警告書：構内交通の要項に対する違反車両に貼り付けられる。悪質でないもの、1回目のものなど、ナンバーがひかえられ、それが2・3度繰り返されると固定される。
- 右・告知書：悪質な違反車両に対する、固定の際に貼り付けられる。森戸道路・正門は全面駐禁。固定解除のためには指導教官の同意が必要。この固定が3回を越えると、構内通行許可証も無効となる。

最後になったが、今年の六月から外部の業者の方に学内に入らせていただいて、駐輪管理をお願いしている。自転車の管理や、自動車・自動二輪への警告や、固定などを行っておられるが、なかなか御苦労があるようだ。かなり良心的に仕事をやっておられるのだが、せっかく移動した駐輪禁止場所に、すぐまた自転車をとめられていたり、貼りつけた警告書が丸めて捨てられていたりするときさすがに虚しくなるとおっしゃっていた。(警告書を貼られて頭にくる気持ちは、わからないでもないが、すぐに固定する事も可能なだし、ナンバーチェックも行われているのである。)

少しずつ良くなっている学内の交通事情ではあるが、まだまだ少なからず問題はあろう。根本的に、構内の敷地面積が狭いこと、西条移転への過渡期であることなど、解決しきれない問題はあろうが、それとは別の次元で努力すべき点もあるはずだ。大学当局側にも、「学生の気質はどうにもならない」というあきらめに近い感情や、利用者側には、「自分一人くらい」という安易な感情があるのではないだろうか。今後も定員増が予想される時期でもあり、ますます、二輪車増が考えられる。構内での交通事故や、非常時の二次災害の発生があってからでは遅い。一人一人が自分にできることを考えて改善して

いく他はない。とりあえず、構内の敷地面積の狭さを自覚して、駐輪区分を守るなり、自動二輪の登録を行うなり、改善に向けて一人一人が少しずつ不便や、手間を分担することが必要だと強く思う。

(文責 小笠原 弘明)



今年五月一日付で広島大学に転任してきました。和歌山県の出身です。大学・大学院時代は広島大学文学部中文研究室で中国の古典文学、主に隠逸詩人陶淵明の研究をしていました。最近、前任校などで中国語を教えてきた関係もあって、中国語文法、日本語と中国語の対照語法を研究しています。

日本語を学んでいる中国人に、日本語のどこが難しいかと尋ねると、漢字の音訓の読み方(中国語は原則として一語一音で、例えば「生」は sheng と発音しますが、日本語ではナマ・セイ・ショウ・キ・イキル・ウム等いろいろな読み方があります。又、「一本」だから「二本」かと思うと「二本」で、「二本」だから「三本」かと思うと「三本」と読むように読み方がややこしい)、敬語、助詞(例えば「は」と「が」の使い分け)などをあげます。どんな構造の中国語の時に「が」を使うかといった具体的な問題から、更に中国語・中国人の思考法の特徴といったところまで、今後研究していきたいと思っています。

赴任して五ヶ月が経とうとしています。中国語履習者が増加していることに驚きます。私が一年生の頃は、中国語を履習している学生は、中文・中哲・東洋史・考古、それと他学部の人がかほんの少しだけでした。それが今では延べ千五百名以上に増えています。留学生も、以前は大陸の留学生は皆無でしたが、今では八十名以上いるようです。これは広島大学だけの現象ではなく、他大学でも同様のようです。それだけは中間の交流が進んでいることの反映だと思われます。尤も、量的な面だけでなく、質の面でももう少し高めていかねばならないと考えます。そのために必要なのは語学力です。

中国旅行も、以前に比べて随分簡単に行けるようになりました。自由旅行、夏休みなどを利用した語学研修、短期或いは長期の留学等、本当に自由に行けるようになってきました。辞書・参考書・カセット教材なども数多くなり、以前に比べて学習環境はよくなりました。やる気さえあれば上達できます。記憶力が良く、感受性の豊かな若い今の時期にしっかり学んでほしいものです。我們一起学习中文！(外国語コース 中国語)

マイケル・ジョン・ラザリン
MICHAEL JOHN LAZARIN, Ph.D.

Specialization: Phenomenology, Structuralism



My disciplined study of philosophical issues began at the age of 13 or 14, when every day for an hour or so after school, I would think about how I knew that the wall of my room, the dark side of the moon and even myself existed. Not even knowing that a 2500 year tradition of asking such questions lay behind me, I sometimes worried about the normality of these thoughts. At that time, I could only answer that this thinking was at least the first step toward determining its merit. Last year, while lecturing in China, a student asked me, "Having studied philosophy, have you found your life in any way improved?" Penetrating questions being such a rarity, I was so completely startled that I probably gave a more honest answer than if I had had time to reflect. I simply said that philosophy was at least the first step toward determining the merit of one's life. Not much progress in 25 years. Still, philosophy has never pretended to be good for much—other than to keep one thinking about matters which are not easily understood.

(外国語コース 英語)

就 職 の 話

編 集 部

「だってさあ、考えてみたらこれまで自分が生きてきた時間の倍くらい、ずっと仕事していかなくっちゃいけないんだよ、たぶん—————」

今年の就職活動シーズンも一応終わりを告げたようである。男女雇用均等法は施行2年目、また8月20日「企業説明会」開始、9月5日「会社訪問」開始、10月15日「内定」開始、と昨年とは多少趣を異にした今年の就職戦線。さて総合科学部の当事者の皆さんの「首尾はいかに?!」といきたいところではあるが、ここでは個々人の顛末はさておき、学部全体からみた就職の特徴などを中心に、「総合科学部の就職」について少し考えてみることにする。近い将来就職を控えている人のためのHow-toものでは決していないので、念のため。

機 関

言うまでもなく、就職は非常に個人的な性格を持つものである。業種、職種、勤務地、勤務形態 etc の選択に「総合科学部」であることはそれほど強く影響しない。しかし、だからといって学部は学生を「勝手にせい」とはつたらかしたりはしない。

まず、総合科学部では毎年度「就職委員会」が組織される。これは各コース大体2名程度の教官が集まって、その年の就職についていろいろ面倒をみるのが主な仕事、と思ってもらえばよい。学部創設時から続いている委員会であるが、当時は社会的にはほとんど無名であった総合科学部の卒業生を、どうにかして企業に(それも少しでもいい企業に)採ってもらわなければ、という切実な使命を帯びていたようである。その後、総合科学部の存在が注目されるようになると、そうそう売れ残りの心配もせずにはすむようになり、就職委員会の役目も様変わりしてきたと言えよう。

就職を考える際に忘れてはならないのが厚生補導係である。部屋の隅に設けられた就職資料コーナーに幾度となく足を運んだ4年生も多いのではないだろうか。ここには、総合科学部生の卒業後の進路が第1回の卒業生からずっと資料として残されており、参考のために閲覧できるようになっている。また学

部取り扱い分の求人票や、各種のガイダンス的な資料も揃えてある。総科生の就職については学内で一番そのノウハウを蓄積しているところであろうから、敬遠せずに利用してみた方がよい。

総科における就職関係の「世話係」ともいうべき主なものは今述べた2つであるが、これ以外にも各コースごとに就職についてのガイダンスが行われているし、多くの先生方が直接間接に支援して下さっている。ただ、私立大に見られるような非常に積極的な就職の後押しは、学部としては行っていないのが事実である。

傾 向

さて、それでは次に過去11年分の資料から総合科学部の就職について見てみよう。まず右の棒グラフを見て頂きたい。地域、社文、情報、環境の4コースの大まかな進路のパーセンテージである。各々のコースの傾向がかなりはっきりと出ており興味深い。地域文化コースでは教員の多さが目を引くし、社会文化は公務員と企業である。理系では、情報行動科学はともかく、環境科学コースの進学4割というのが目立っている。

環境の進学率の高さについてであるが、自然科学系の場合、学部のうちは「研究」などとはとても言えず、大学院に進んではじめて自分の専門分野の研究に多少なりとも携われる、という話をよく耳にする。筆者はいわゆる文科系の学生なので、今一つ実感が湧かないのだが、やはりそういったことを反映したものであろうか。

地域文化コースで教員が1/5を占めるというのは、他のコースより女子学生が多いことに起因するのではないかと思われたため、計算を試みた。まず地域文化における女子学生の割合は87年春の卒業生までで47.8%である。次に教職に就いた卒業生に占める女子の割合であるが、地域は40.8%であった。社会文化が35.0%、情報が31.8%、環境がかなり低くて13.6%となっているから、やはり地域が一番高率ではある。しかし全てを女子の数に帰すのは無理があろうかと思われる。

社会文化の公務員志向は、一般的にも法学部と経

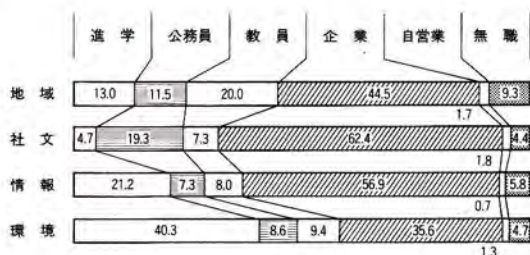
経済部の学生に公務員志向が強いことから説明がつこう。参考までに付け加えておくと、広島大学の場合、61年度の法・経済学部全卒業生(含2部)の就職のうち公務員は34.1%を占める。法学部の昼間部男子に限ると、この数値は41.5%になる。(法・経済学部「就職の手引」1987より)

文科系と理科系の両方を備え持つ総合科学部では、他の学部の就職についての特徴が1つの学部の中に現れると言うことができよう。

以上、進学、公務員、教員、企業、自営業という大枠で見えてきたが、「職種」についても少し触れておこう。総合科学部生は進路が決定すると、自分が所属するコースの連絡室(図書室など)への報告を行うが、同時に厚生補導係にも内定届けを提出する。この用紙、内定職種に○をつけるようになっているのだが、その項目がふるっている。「内定職種:事務、営業、ソフトウェア、技術、研究、記者、教職、その他」というわけである。『日本標準職業分類』に合致していない云々、ということはこの際おいておく。つまりおおまかであるとはいえ、総合科学部の卒業生が就く仕事をイメージさせるような分類なのである。(円グラフ参照)

若干の変動はあるが、ソフト会社への就職はご存知の通り売り手市場である。自然科学系の学生が、「企業」に就職するというのは、ある程度までメーカーの技術者を想定してもよからう。教職については地域文化コースの例があるし、マスコミ関係の就職は実際記者が多いようである。文系、理系とも5割を超える企業就職のうち、文系の相当数は、事務・営業に分類できる筈である。しかしながら、これらは、あくまで初職から判断したものであり、また、正式な配属先をもとにした資料ではないことをお断りしておく。

— 過去11カ年の卒業生の進路・コース別 —



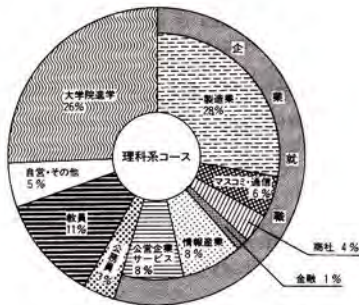
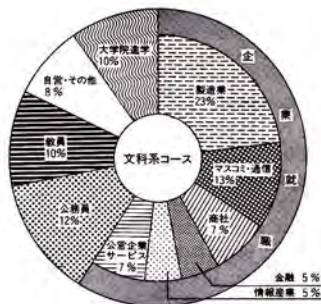
(聞き書き)

数字には表れてこない総合科学部の就職についての話をいくつか挙げておこう。

まず、企業側からみた総合科学部の卒業生の魅力について。例年約250件程度の求人があり、今年は、昨年より約1割増えたと言う。「総科生のアピールポイントはなにか」。気になって尋ねてみた。「一言でいったら“柔軟性”。何のかんの言っても広く浅くいろんなことをやっているから、会社に入って自分の専門とは離れた仕事に携わることになっても、適応が早い。日本の場合、仕事に必要な訓練は入社してから会社が自分でやるから、私はこれしかやりません!という学生よりはウチの学生みたいなのが好まれる。」とは、厚生補導の就職担当者の弁。だからと言って在学中の自分の専門がいい加減でもかまわない、などという不埒な考えは抱かぬように。

それから、総科生の地元志向について。総合科学部の地元占有率(つまり広島出身者の割合)は、だいたい3割とってもらってよい。卒業後、広島に就職するのでもこれくらいのものである。しかし、地元出身の人間がそのまま地元で就職するわけではなく、他府県から総合科学部に入学して、卒業後も結

— 最近5カ年の卒業生の進路・文理別 —



果的に居ついてしまう者が少なくないことによるものである。住めば都というわけか。広島以外での就職の場合は、九州→広島→東京に典型的な、いわゆる「中央志向」型がある。また出身地→広島→出身地(戻ると言っても県レベルであるが)のUターンも依然根強いようである。

最後に均等法施行とも関わるが、女子学生の就職について。男子の場合と異なり、女子は就職の際、どれくらい働き続けるつもりなのかということや、結婚、出産、育児など「先」のことについて、ああでもない、こうでもないと考えなくてはならないようである。世間一般に流布しているようなマニュアル通りにいかないのが女子の就職であろうから、就職活動を行う前に自分にとっての職業選択の「条件」を明確にしておくことが必要であろう。コースによっては女子の急増で、就職指導に頭を痛めているところもある。「ウチの女の子はみんな元気で、あ

ちこっち自分で動き回っているけれど、一度相談に来てくれたら、そんなに苦勞しなくてもよかったのに、というケースがちらほら見受けられる。」という担当者の声もある。相談する側もされる側も、もっと積極的に自己の存在をアピールしないとったいない。今後の課題であろう。

という具合に、総合科学部の就職についてざっと見てきた。受験時の大学の選択よりも考慮すべき事情が多いのは疑いもない事実であるし、能力だけでは解決しないことも複雑に絡んでくる。

それでも避けて通れない、社会への関門である。

「やってみなくっちゃわかんないことってあると思うけど、でも、いい仕事したいよね、やっぱり」
(文責 藤本 貴子)

新任紹介 その5

ピーター・アンソニー・ゴールズベリ
PETER ANTHONY GOIDSBURY



I was born in a small village located in the English midlands, not far from the Saxon city of Nottingham. After completing my education at a local public school, I spent a few years as a student of philosophy in France. On my return to England I entered the Department of English at the University of Sussex. It was here that I met a young "ryugakusei" from Tokyo University, who introduced me to the Japanese martial art of Aikido. I continued the practice of Aikido throughout the remainder of my education,

at Harvard and London Universities. The fact that it does not have competitions and was taught entirely in Japanese made Aikido very attractive. I am sure that my Aikido practice had a big influence on the decision I made in 1980 to come and live in Hiroshima.

So now I live here and, through the support and encouragement of colleagues in the English Department of Sogokagakubu, I am honoured to be an Associate Professor in the same Department. What are my reactions to life at Hirodai? Mainly very favourable. I enjoy the contacts with the students, especially outside class hours, and the relative freedom that academic life affords. There are one or two negative reactions, however. Even after over seven years here, I continue to be astonished that Japanese university students study so little. Of course, I understand that the four years of university are a kind of 'parole' sandwiched between the two long prison sentences of high school and so-called 'lifetime' employment. But if Japan is to become a truly 'international' society, the university system must change: the reputation abroad of undergraduate courses in Japan's universities is very poor. It is a big shock for Japanese students going to universities in the West to realise that unless western students study hard, they are expelled from the university.

In Japan, extracurricular activities show the same broad diversity as in western universities. But there is one difference. In Japan, political activity on the campus is much more obtrusive. In no western country would students be allowed to use powerful loudspeakers to drown out the lectures and seminars. A university is, to my mind, a place for teaching and learning by means of the free exchange of ideas, but a stream of political abuse through a megaphone is neither free nor an exchange. The fact that such strident political activity has continued since 1969 shows singularly poor leadership by the University administration.

However, even when these negative aspects are considered, it remains true that the 'plusses' of living in such a highly variegated culture as Japan's, and especially living in Hiroshima and working at Hirodai, far outweigh the 'minusses'. (外国語コース 英語)



午後五時を過ぎると、教室は様々の顔を見せ始める。音楽系サークルの練習場、ミーティング室、そして友人とダベるための休息室。もちろん、五コマ目や二部の授業のように本来の目的の為に使われる所も見落としてはいけない。

そして、午後九時過ぎ。人気教室から消え、後には様々な物が置き去りにされている。教科書、丸められたパンフレット、黒板の英文等々。その中で最もよく目立つのが、電気の消し忘れである。

総合科学部の中でいわゆる講義室と呼ばれる部屋は44。学生実験室まで含めると、ざっと60ほどの部屋が教育を主目的として学生に開放されていることになる。そして試験期間も終わりに近づいたある日の午後九時過ぎ、こうこうと明かりのついていた部屋はその内9つ。

数としては確かに一桁であり、目くじら立てて怒るほどのこともないような気がする。しかし、全体に対する割合を弾き出せばこの数字の持つ意味はがらりと変わってくる。全体の $\frac{1}{6}$ の消し忘れとなると、そこには切迫感すら漂う。

石油ショックのおかげで「資源節約」「エネルギー節約」が叫ばれ始めてから、もう十年以上になる。節約の掛け声に当時のようなヒステリックな響きはもうないが、その分社会の奥底で通奏低音のようになってしまった感がある。少なくとも、節約の意識は人々の頭に染み込んだようだ。そして年間エネルギー消費量などの統計数字には、確かにそれが表れている。

しかし現実の生活を見れば、まだまだ無駄は相当に多い。必要以上の供給と必要以上の消費がさらに互いを増幅させていく。明かりの消し忘れは、その一例に過ぎない。

需要が増えるから供給が増えるのか、供給があるから需要が増すのか。こうなればもう、生産者と消費者の間の永遠の水掛け論だ。ただ言えるのは、今のままではやがて飽和点に達してしまうということだけだ。我々は確かにそのことを確信し、その時が来るのを不安に思っている。そして今はまだその時ではないと思い、今まで通りの生活を続けている。決していい事ではないとわかっている、もう少し安穩として暮らしていきたいというのが、人々の本音ではなからうか。

9時に学生が去ってから約1時間。蛍光灯は何もない教室をただ照らし続ける。経済的な面もさることながら、その光景があまりぞっとしないのも確かだ。人なき建物の無意味さが、妙な不安をかき立てる。

午後10時頃、廊下やトイレ等を除く無人の部屋の明かりは、全て事務の人々の手によって消される。しかし決して総科全体が眠るわけではない。徹夜で研究・実験を続ける人々の熱気を吸い込んで、総科の夜は静かに更けていくのである。

(文責 青山 幸樹)

はじめまして

はしはら よしひろ
橋原 孝博



私の名前は「孝博」と書き、誰もそう読んでくれませんが「よしひろ」と言います。父親が、将来親孝行で博学な息子になってくれるようにと願って(?)名付けました。その甲斐あってか、今春3月25日に筑波大学で教育学博士号を授与され、学位授与直後、4月1日付で郷里の広島大学総合科学部保健体育講座に就職しました。

私の研究は運動技術解析で、体育学の世界では主としてバイオメカニクスの領域に属します。最近では、運動技術解析もコンピューターやフィルム分析装置の発達、分析方法の開発などにより、多量のデータをより簡略な方法で示し、より信頼性のある結果を得ることができるようになりました。つまり、3次元映画撮影法(Direct Linear Transformation Method、略してDLT法)の開発により、オリンピックやワールドカップなど公式試合における運動動作の定量分析が可能になったこと、また、コンピューターに直結したフィルムモーションアナライザーの発達や規格化・平均化というデータ処理法の開発により、一選手のフォームばかりでなく複数の選手の平均的なフォームもグラフィック化することが可能になりました。私はこのような分析方法や分析装置などを駆使して、将来、運動技術の指導内容を編成していきたいと考えています。

私のスポーツにおける専門はバレーボールで、講師就任以来、体育実技ではバレーボールの授業を週2コマ担当し、体育会運動部では広大千田バレーボールチームの監督を務めています。ここで、広大千田バレーボールチームと書かずに、広大千田と書いたのは、広島大学のバレーボール部は昭和46年以降(当時、私は教育学部高等学校教員養成課程の2年であり、帰福生の一人でした)、福山キャンパスを中心とする広大千田チームと千田・東雲キャンパスを中心とする広大千田チームに分かれた状態にあるからです。分かれた理由は、別に福山チームと千田チームの仲が悪いからではなく、その当時からバレーボール攻撃面でコンビネーションプレイが重要視されるようになったからです。さて、広大千田チームは、現在、男子部員が22名、女子部員が15名居ますが、残念なことに我が総合科学部出身の部員は一人も居りません。バレー部の練習は東千田キャンパスの体育館で行っており、総合科学部棟からは目と鼻の先の距離にあります。総合科学部の学生諸君、名実ともに総合科学部の学徒になろうではありませんか。

最後になりましたが、故岡本哲彦先生の御冥福をお祈り申し上げますとともに、今後とも尚一層の御指導御助言を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。(保健体育 講師)



やまお まさひろ
山尾 政博

去る10月1日に、アジア研究講座にアジア政治経済担当講師として赴任して参りました山尾政博と申します。

簡単に私のプロフィールを紹介させていただきます。生年月日は、1953年11月26日、岡山県玉野市で生まれ高校卒業時まで岡山弁の中で生きてきました。広大な牧草地で北国の青い空を見上げれば人生が開かれるという思い込みで、北大農学部を選び、そのまま札幌で10年間を過してしまいました。札幌は、開拓の歴史が浅いだけに、また流れ者(今も昔も)によって構成されている街だけに、溶け込み易い街でした。

1984年1月、住み慣れた札幌を離れ、気候も風土も全く違うタイ王国バンコックに赴任。国際協力事業団の派遣専門家として、国際機関 Southeast Asian Fisheries Development Center に所属し、東南アジア水産業について調査活動を行ってまいりました。沿岸零細漁業者の存在形態、水産物物流通、漁民協同組合組織等についての調査を行ない、報告書を作成するのが私の役目でした。結局、今年の1月までの3年間バンコックで暮らしました。タイは、いい国です。自然の圧倒的な恵みは言うまでもなく、自由に生きる人々の姿は魅力的です。任期を終え、再び古巣の北大に戻ったのが今年の真冬。東南アジア漁業の発展方向についての論文をまとめ、それを学位論文として提出したのが九月の中旬。審査が終ると同時に、広大に赴任した次第です。

今後は、「広島風お好み焼」に親しみつつ、アジア政治経済の分野で、教育・研究に専心する決意です。宜しくお願いいたします。(地域文化コース アジア研究)

「飛翔に関するアンケート」集計報告

今回飛翔では初めての試みで全学年、教官、事務官にアンケートを行った。このアンケートの目的は、用紙の最初にも書かれてある通り、「飛翔」がどのように受け取られているかを把握し、今後の編集に役立てたいというものであった。そのため種々の検討を重ね、実施したものである。

番号記名について。学生用のアンケート用紙には、アンケートらしからぬ学生番号記入欄があり、奇異に感じられた方も多と思う。又、これではアンケートにならない、という指摘もあった。その記入欄を設けた理由とは、特に誰が何を書いたのかを調べるためではなく、興味深い意見を述べている人に、直接編集委員がインタビューしよう、という考えからで、不快に思われた方には深くお詫び致します。

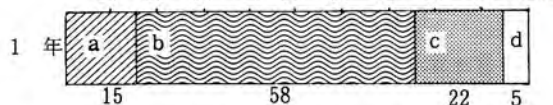
1年生のみの質問(その1) あなたは学部広報誌「飛翔」を知っていますか。

知っている 100%

さすがに入学式の時に配布され、飛翔委員をチューター別で選出しただけあって全員がその存在を知っていた。

(その2) あなたは入学時に配布された「飛翔」を読みましたか。

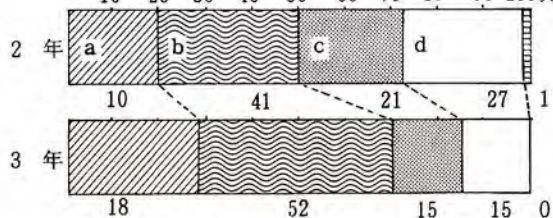
- a. 全部読んだ c. ほとんど読まなかった
b. いくつかの記事を読んだ d. 全く読まなかった



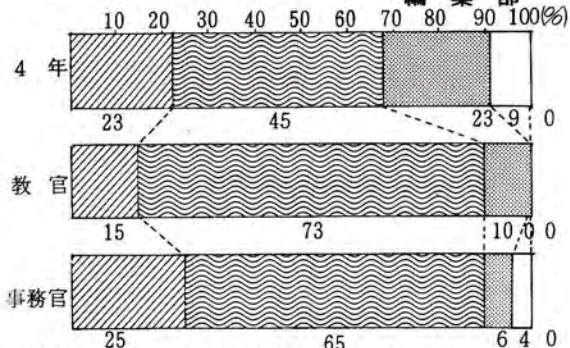
入学式の時、「飛翔」を読むように、と指示されたが、他学年と比べてさほど多くなく、読んでいない人もいくらいた。

他学年、教官、事務官への質問: あなたは学部広報誌「飛翔」を読んでいますか。

- a. 毎号全部読む c. ほとんど読まない
b. 毎号一部読む d. 受けとっていない



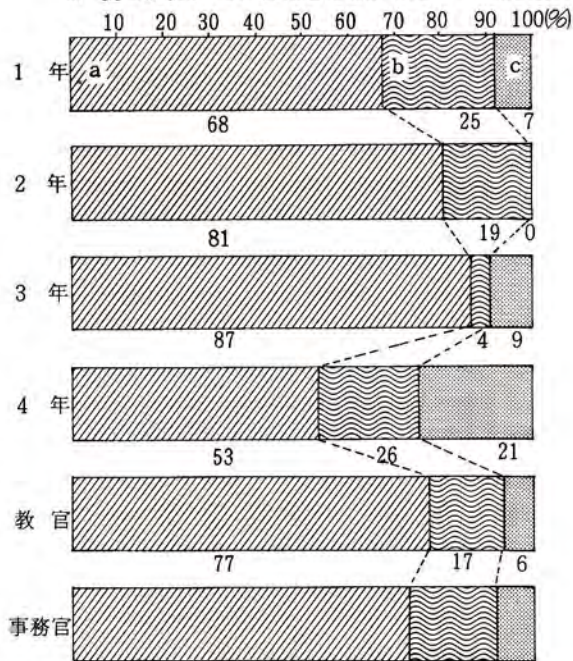
編 集 部



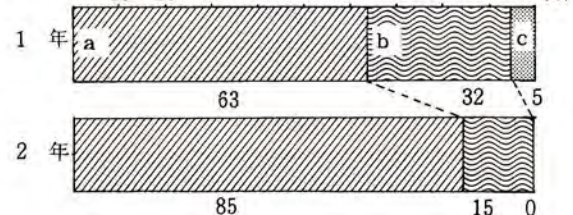
半分以上の人が飛翔を全部又は一部は読んでいて、関心はかなりあるということがわかった。しかし学生では受けとっていないという人が教官、事務官に比べて多く、配布方法などに問題があるようだ。

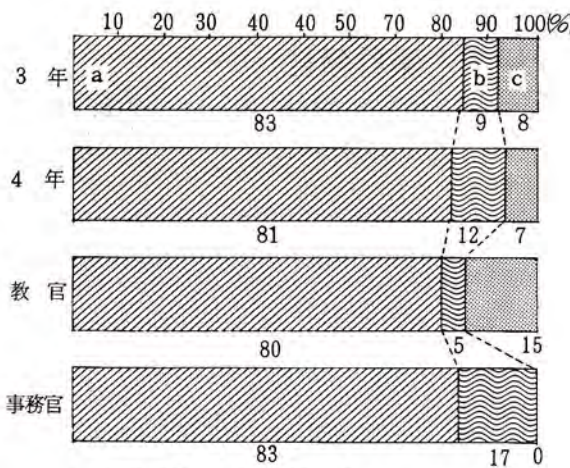
問2 「飛翔」を読んでいる方にお聞きします。読んでみてどうでしたか。

- a. 役に立った b. 役に立たなかった c. 無回答

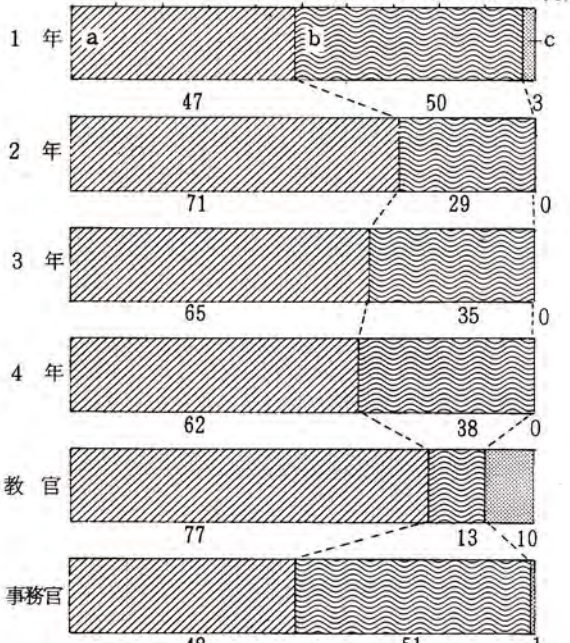


- a. おもしろかった b. つまらなかった c. 無回答

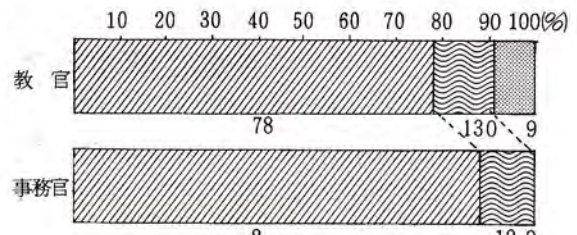
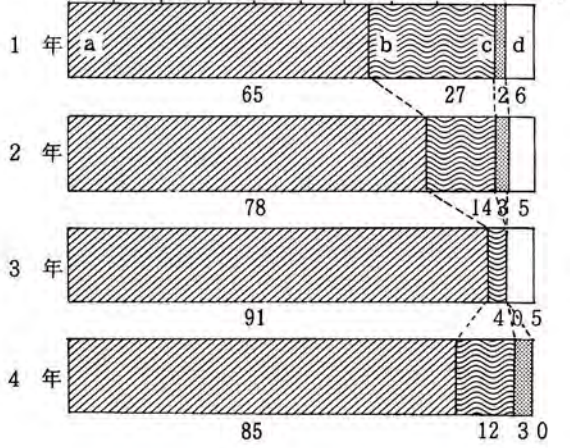




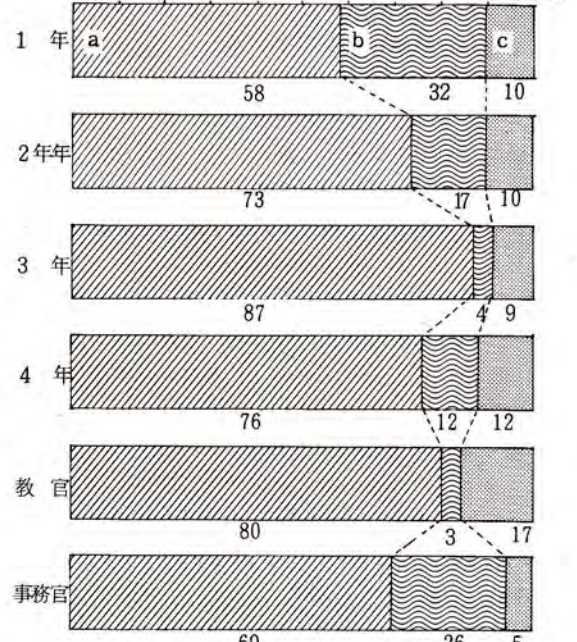
a. 印象に残った記事があった
 b. 取りたててどうということはない c. 無回答



a. 量は適当である b. 多かった c. 少なかった d. 無回答



a. 読みやすかった b. 読みにくかった c. 無回答

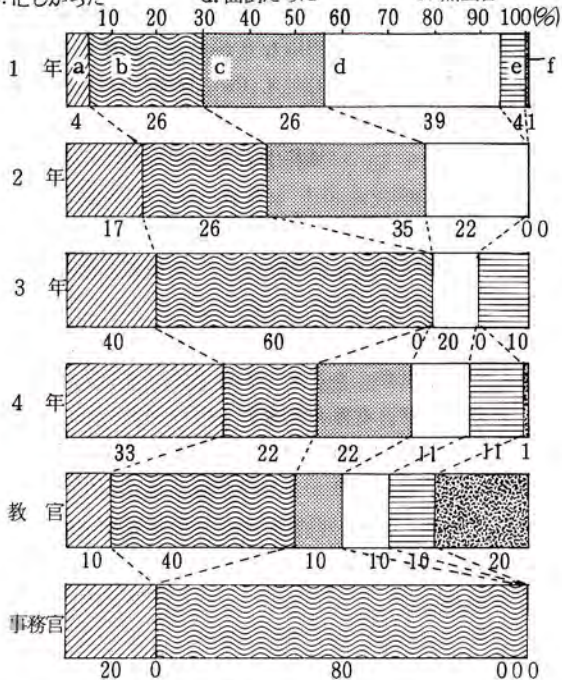


全体を通してしてみると、イ・役に立った、とする人が7割以上、ロ・面白かった、とする人が8割以上、ハ・印象に残った記事があった、が5割以上、ニ・量は適当であった、とする人が8割以上で、量が少ない、とする人は、どの学年、教官、事務官も3%以下で少なかった。ホ・読みやすかった、とする人は、1年生では6割であったが、他学年では8割以上の人が読みやすいとしていた。やはり広報紙だけに堅い文面が多く一年生はまだそういった物に慣れていないのが原因かとも思われる。他に気のついた事として、ハ・とりたててどうということはない、のみに答えた人が結構いた。これは、イ・ロ・ホ・の間には、どちらでもない、という項がなかっただけに、特に役に立ったと思わなかった人は、意思表示としてそのみに答えたのかもしれない。以上の結果より飛翔は読んだ人には比較的好印象を与えているとしてよさそうである。

問3. 「飛翔」を読んでいない方にお聞きます。

なぜ読まなかったのですか。

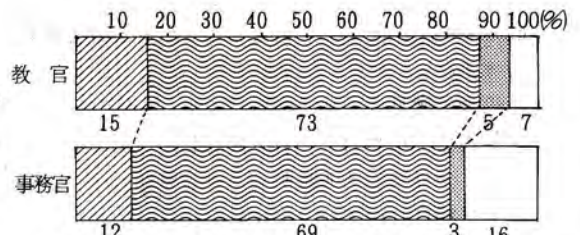
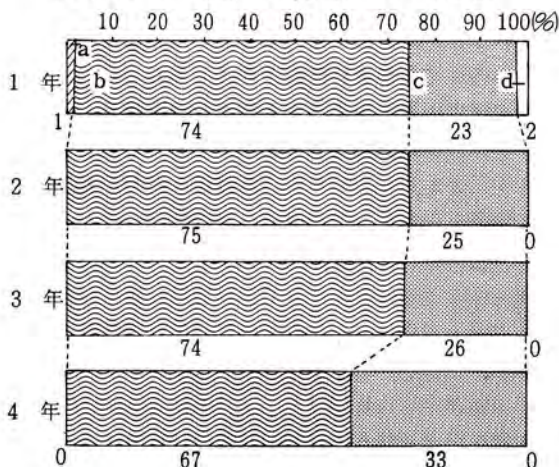
- a. 必要を感じなかった c. 興味を引かなかった e. 読みにくかった
b. 忙しかった d. 面倒だった f. 無回答



一年生は、必要を感じなかった、が少なく、面倒くさかった、が一番の理由だった。入学式のとき読むように言われたが面倒だったので読まなかった、という人が多いようだ。他学年、教員、事務官ではそういった答が比較的少なかった。又教員では、忙しかった、という答の多いのが目立った。

問4 現在「飛翔」は年2回(春・秋)発行していますが、この発行回数は適当だと思いますか。

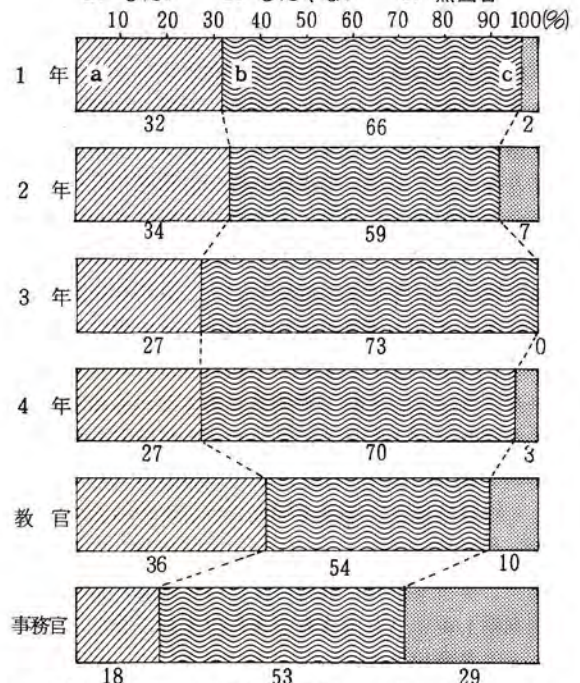
- a. 多い b. 適当 c. 少ない d. 無回答



全体を通して7割以上が適当であるとしているが、学生と教員、事務官では発行回数に対する考え方が異なり、学生では、多い、とする人がほとんどなく、逆に教員、事務官では、少ない、とする人があまりいなかった。

問5 現在「飛翔」には「飛翔箱」のような投稿の場もありますが、機会があれば投稿したいですか。

- a. したい b. したくない c. 無回答



3割くらいの方が投稿してみたいとしていた。しかし学生の中には「飛翔箱」の存在を知らない人もかなりいるようだった。せっかくの総科の広報紙であるからそのような投稿の場を有効に活用できるように改善すべきであろう。

学生だけに質問 飛翔の編集に携わってみたいと思いますか。

	1年	2年	3年	4年
携わってみたい	4%	1%	3%	3%

この問に対して編集に携わってみたいという人が何%ずついた。編集委員としては嬉しい限りで、是非とも協力してもらいたい。

問6 今後「飛翔」でどんなことを取り上げて欲しいですか。

(代表的意見)

- 総科内で行なわれている研究活動について
- コース分けに対する説明や人々の意見
- 西条移転について
- 就職や卒論などについて
- 大学院生、留学生の取材

学生に対するこの問いでは、上の5つが代表的意見であった。各学年を通して、総科内の研究活動や教授の紹介をして欲しいという意見はかなり見受けられ、特に一年生にそういう意識が強いようだ。コース分けに対する意見では、一年生はどのコースがどんな風になっているか、といった進路を決定するための目安となる記事、他学年では現在のコース編成に対する人々の意見やその検討といったものを取り上げて欲しいという事である。就職、卒論については学年が上がる程要求度は高まっていくが四年生よりも三年生の方が要求度が高い。飛翔で取り上げるような総括的な記事よりも詳しく実際的な情報が必要としているのかもしれない。西条移転は広大全体の問題ではあるが、移転によって総科全体が変化するのかがどうかが注目されている。他に留学生、大学院生に関する記事を書いて欲しいといった意見がかなりあった。総科の構成員でありながら今まであまり取り上げられてこなかった。今後検討を要すことだと思う。他に、他学部はどう思われているか、とか総科卒業生の意見を聞きたい、といったものもあった。

2・3・4年生に質問：学部内広報誌としての、「飛翔」はどのようなものであるべきだと思いますか。

(代表的意見)

- あまり堅苦しくなく読みやすいもの
- 迅速性のあるもの
- 編集委員は文系、理系両方にわたるようにする
- 多くの人が参加するようにする
- 全員に確実に行きわたるようにする

この質問に対しては上の5つが代表的意見であった。文面が堅いという指摘は広報誌であるからある程度仕方ないであろうが、読みやすくする努力は続けなくてはならない。次に、「飛翔」は年2回発行ということもあって迅速性は弱いと思うが常にその時総科内で起っている事を記事にすべきである。「飛翔」の仕事は編集であるからどうしても文系の人が好んで取り組むことになりやすい。現在「飛翔」の編集委

員はやや文系の人に傾りがちなので理系の人で編集の仕事をやってみたいという人は遠慮せずどんどん参加してもらいたい。他に多くの人が「飛翔」に参加するよという意見がかなりあった。又飛翔箱(投書欄)もあるが、不明瞭な点がある。編集部宛てに投書が届くよう工夫してもよい。前述したが、学生の中には配布されていないという人がかなり多い。大学生というものは高校生のように全員が一同に集まる事がほとんどなく配布しにくい面もあるが、広報紙が配布されないのは好ましいことではない。編集方針とは直接関係ないが検討を要する事柄である。

問8 (その1) 教官、事務官に質問：学部広報誌としての「飛翔」をどのように考えますか。

教官・事務官は様々な意見を持っておられ、これといった代表的な意見はなかったが、全体を通してみて、学生の生の姿がある程度分り役立ってはいるが、広報誌としての機能がまだ十分に発揮されていず物足りなさを感じている、というのが大方の意見であった。

(その2) 今後へのアドバイス

全体的に質の向上を要求する意見が多い。例えば、投稿や依頼原稿等を増やし、現在の総科構成員に限らず卒業生等、多くの人に参加してもらうように工夫する、総科の今後や現在の問題点を提起し解決に向けての提案をする、編集会議に多くの人の参加を依頼しアイデアの更新を望む、などがあった。他に、地味な勉強の話をもっと取り上げて欲しい、とするものや、色々な研究室や先生方をシリーズで紹介しても良い、といったものもあった。又、学生の意見の中にもあったが、外国人留学生の事を取り上げて欲しいというのは教官の中にもいくつかあった。

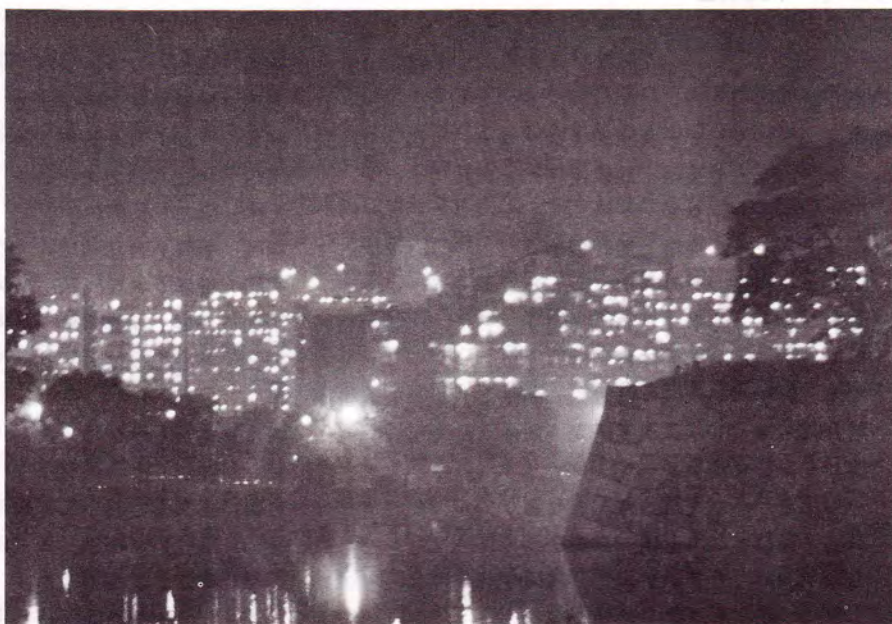
最後にアンケート結果をまとめてみて「飛翔」は多くの人に期待され注目されていることがわかったのでより一層紙面の充実を図りたいと思う。

アンケートに御協力頂きありがとうございました。

(文責 布川 勝彦)

「コンクリートの憂鬱」

編集部



何も知らなかった二年半前。陽が沈んで、この建物にも明かりがとれる頃、テニスコートから見たその風景に、吸い込まれた記憶がある。

「なんて美しいだろう……」

闇にそびえ立つ、コンクリート造りの無機質な建物が放つ白い光は、その頃の私にとっては美しい「夜景」以外の何物でもなかったのだ。

時の流れと平行して、私はこの街に慣れてゆき、この街を知り始めた。美味しいお店やバスの路線や、桜や紅葉の名所。それと同時に、悲しい歴史や重苦しい事実をも知った。幾度となくこの住居群のそばを通り抜けたこともあった。その時の私は、もう何も知らずに夜景を美しいと眺めた、田舎から来た新入生ではなかった。

しかし、その度毎にこの街の抱える深過ぎる傷跡や、継続する問題に悩み、憤ることはない。ただ、視野に飛び込んでくる風景は確実に心の奥深くで反映し、私の感情を「ある状態」へと導く。

時が流れてもコンクリートは朽ち果てることもなく、闇の中に住居群は煌々と輝く。変わらぬ風景を美しいと見つめるとき、私の心を憂鬱がまとう。

(文責 鈴木 美緒)

編 集 後 記

本号の飛翔には“特集”がない。新学部長の就任の挨拶と事件その後の経緯パート2が読者の関心事となろう。学生編集委員の汗の結晶である興味深い多くの小企画も総合科学部の現状を映し出してはいるのだが、学部内外に与えた事件の衝撃には勝てない。飛翔は“世間”と学部を結ぶ唯一の広報誌として注目を浴びる宿命に耐えなければならない。一刻も早い回復・再生のために。

(広報委員 岩田 賢司)

編集の学生諸君ご苦労様。夏休みやテスト中も、加えて追悼号の編集従事 — その労苦は学部学生の輪に和をもたらし、そしてきっと学部充実の核になるものです。

(広報委員 春日野省三)

今号の編集では、その方針が情勢に応じて二転三転させられ、いろいろ考えることの多い作業でした。

(広報委員 佐竹 昭)

障害物競争を思わせる今回の「飛翔」発行でした。おかげさまで、大学の英字新聞部でキャップをしていた頃を思い出してしまいました。

(広報委員 春田 節子)

本号の企画に入ったのが、5月の連休明け、そして今は、冬休み直前。汗が吹き出たプレハブの編集会議がなつかしい?!

(厚生補導係 宮城 勝彦)

小笠原さん、ワインとっても美味しかったです。それでは私は三絃を弾きにゆきます。

(伊藤多喜子)

季節が移りゆく時の風。その風はいつも懐しさと予感をはらんでいる。そしてただそれだけのこと。

(海住 隆雄)

編集にまるで協力しなかった人間が言うのも変ですが、充実した内容と、読んで損をすることがないことは保障します

(桑迫 敏)

とりあえず風邪をひいて私はしんどい。なのに2時半まで人の家で割り付けをするな、ボケと言われてもらおう。明日も自主休講。

(桑原 秀行)

本を買いあさる前に、本棚を買う金が要ることを覚えておかなくてはならない。でないと部屋が…。

(下野 寿子)

ここは当初私達が目指していた場所とは大きく違っている。しかし私達は私達なりのゴールを探し続けたことを明記しておきたい。

(戸敷 聡)

鬼の九月だった。

(布川 克彦)

「聞いてみると変われんじゃろ」を心に、これからもゆっくり歩いていこう。日本酒と歌もひきずって…。

(福永 弘樹)

事件にも合宿にも記事にもノータッチだった私は、一体何だったんでしょう。

(宮尾 任道)

どんなに大きなできごとも、時と共に風化してしまう今の世の中が私はキライだ。でも今回号が出て良かった。

(矢野 泉)

忙しくなるとすぐ頭がパニックになり、思考回路は停止し（もともと作動していないという説もある）現実逃避してしまう私です。そんな私はミシンが欲しい……ふふ。
（内藤千恵美）

忙しかった「はず」である。けど何だか暇に「感じる」。夏休みに時間の流れが歪んでから、茫然として今に至った。
（青山 幸樹）

時は生み出すもの。パワーはひねり出すもの。疲労は自分で癒すもの。やっぱり tough - It's tough.
（小笠原弘明）

ここ最近、決断を迫られることが多々あった。どうして世の中、こう割り切れないことが多いんだろう…。
（新迫 明美）

クリスマスにN.Y.に行きたい。でもパーティにも行きたいし、ワンピース欲しいし、ビデオも欲しいし、CDプレーヤーも欲しいし、車も欲しい。私って煩惱しかないのかしらん。

（鈴木 美緒）

「勁さ」がさ、螺旋階段を一段とぼして跳ね昇ってんだからね。気付いた私にコワイもんなんてないのよ——と奔流のような自我が言う。

（藤本 貴子）

秋の号の発行が大幅に遅れましたこと、加えて、飛翔箱を今回編集部事情により休載しましたことを深くお詫びいたします。

故 岡本哲彦前学部長の御冥福をお祈りいたします。